

総合型地域スポーツクラブへ ラートを導入させる際に生じる諸課題の考察

Considerations of Problems on Entering Wheel Gymnastics into the Community-Based Sports Club

深瀬友香子 松澤淳子
(Fukase Yukako Matsuzawa Junko)

Abstract :

The aim of this study was to come closer to resolution of problems that occur on entering wheel gymnastics into the community-based sports club. Here, I considered particular issues from two aspects.

First, there are the problems attributed to its motional property. Those are the club side's concerns about safety of the sport. So I investigated characteristics of beginners' skills and feelings, and showed basic methods of beginner coaching to dispel that kind of concerns. The second are management problems. One is space. Wheel gymnastics activity needs big space, so it's effective to seek the cooperation of local administration to lend the space by insisting public interest of the activity and its achievements. Another management problem is to secure funds. It's effective to join forces with parent organization like Japan Wheel Gymnastics Association, and apply for subsidy.

キーワード：総合型地域スポーツクラブ、ラート導入、課題考察

Key Word : Community-Based Sports Club, Entry of Wheel Gymnastics,
Considerations of Problems

1. はじめに

1) 総合型地域スポーツクラブ設立の社会的背景

近年の青少年の体力・運動能力の低下傾向、身近なスポーツ環境の整備充実の必要性の高まり、国際競技力の長期的・相対的低下傾向等の諸課題に対応し、日本のスポーツ振興施策を体系的・計画的に推進するため、スポーツ振興法に基づき、2000年にスポーツ振興基本計画(2006年改訂)が策定された。計画では次の3つの方策を挙げ、その上で2001年から概ね10年間(2001年~2010年)で達成すべき「政策目標」と「具体的施策」を挙げている。

- a. 地域におけるスポーツ環境の整備充実方策
- b. 我が国の国際競技力の総合的な向上方策
- c. スポーツの振興を通じた子どもの体力の向上方策

方策 a の政策目標として、生涯スポーツ社会の実現のため、できる限り早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が50%となることを目指しているが、その具体的施策のひとつとして、「総合型地域スポーツクラブ」の全国展開が図られている。計画には2010年までに全国市区町村において少なくとも一つは総合型地域スポーツクラブを育成(創設および創設準備)するという施策が明記されており、国は日本体育

協会や都道府県体育協会に対して、運営面や金銭的なサポート等を積極的に行っている状況である。

総合型地域スポーツクラブの数は、2002年度には541であったが、2008年度には2768と、過去6年間で2.5倍に増えており、総合型地域スポーツクラブは急速に普及してきているといえる。また、2010年までに全国市区町村において少なくとも1つは総合型地域スポーツクラブを育成するという施策が掲げられている中、2008年7月の時点で、全国1810市区町村中、1046の市区町村において、クラブが育成されている。クラブの育成率には地域差があり、スポーツに対する考え方や各市町村の人口規模や高齢化、過疎等の様々な要因が存在するものと考えられている⁽¹⁾⁽²⁾。

2) 総合型地域スポーツクラブの特徴

総合型地域スポーツクラブとは、地域住民が主体的に運営する、非営利的なスポーツクラブである。総合型の意味するところは、クラブに以下のような特徴が盛り込まれているということである。

- a. 多様な種目が用意されている。
- b. 子供から高齢者まで、多様な世代・年齢層の会員が参加できる。
- c. 初心者からトップレベルの競技者まで、多様な技術レベルの会員が活動することができる。

これまで日本で多く見られた、ママさんバレーや野球少年団のような、単一種目、限定的な年齢層のクラブではなく、あくまで複数の種目があり、幅広い年齢層がいつでも気軽に参加できるクラブであることをスポーツ振興計画では定義している。この総合型地域スポーツクラブという概念は、ヨーロッパで発展している地域スポーツクラブを手本としているものである。

2009年に開催された総合型地域スポーツクラブに関する有識者会議によると、クラブの設立効果に関する調査から、総合型地域スポーツクラブが国民のスポーツ実施率の向上に寄与していることがうかがえ、さらに、世代間交流等の地域社会の活性化や再生に寄与していること

がうかがえるとの報告があった⁽¹⁾。総合型地域スポーツクラブ育成の最大の目的は、先に述べたように、誰もが気軽にスポーツに親しめる生涯スポーツ社会の実現であるが、地域のコミュニティの核として、青少年の健全育成、地域教育力の回復、地域の健康水準の改善等の社会的なメリットも期待されている。

3) クラブが抱える課題例

総合型地域スポーツクラブは地域住民の主体的な運営のもと成り立つクラブであるため、資金捻出の自助努力を行う、会員のボランティアを促す等、それぞれのクラブで運営を工夫していく必要がある。また、それに伴い個々のクラブにおいて、さまざまな運営上の課題もあがっている。2008年度に実施された総合型地域スポーツクラブに関する実態調査によると、「クラブの現在の課題」は【図1】のとおりである。50%以上のクラブがあげている項目は、会員の確保(66.8%)、指導者の確保(52.9%)、財源の確保(51.6%)であり、その他にも、活動種目の拡大(29.2%)、活動拠点施設の確保(26.9%)、学校関係者の理解(26.7%)、行政との調整(24.9%)、既存団体との関係(24.1%)などが挙げられている⁽²⁾。総合型地域スポーツクラブは、2000年に策定されたスポーツ振興計画を期に、日本において始められた新しい取り組みであるため、様々な課題が浮上してくるのは当然のことである。その課題を明確化し、考察を深めていくことが解決策を導き、さらによりよいクラブへと発展することにつながって行くと考ええる。

4) 本研究の目的

これまで国の施策によってクラブの数を急激に増やしてきた。しかし現在、優秀な指導者やクラブマネジャーの確保、そして、クラブが提供するプログラムの充実等、クラブのソフト面が追いついていない状況にある。このような行き詰まりを打開する策のひとつとして、着しやすき事柄がプログラムの充実、つまり新しい種目をクラブに導入させていくことであると考える。そこで着目したのがラート⁽¹⁾というニュー

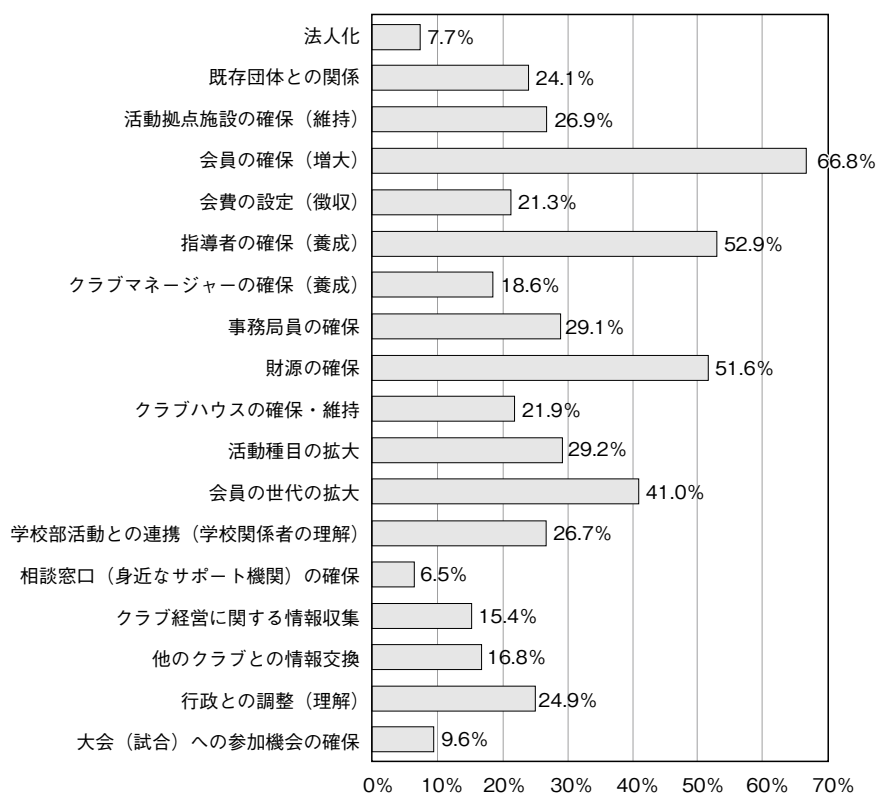


図1. クラブの現在の課題

資料：平成20年度総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果概要⁽²⁾より

スポーツである。ラートは関節に負担のかからない、ゆっくりとした運動であるため、現在、小学生から中高年の方まで、幅広い年齢層の愛好者が存在する。そのようなことから、総合型地域スポーツクラブに適合しやすく、さらに、新しく珍しいスポーツとして、会員をひきつける種目であると考えた。しかし新規種目のラートを、既存の総合型地域スポーツクラブに導入してもらおうと交渉する際には、当然ながら様々な課題が発生すると考えられる。導入検討の交渉をスムーズに進めるために必要なことは何か、という観点で、ラートという種目特有の課題を整理していきたい。

そこで本研究においては、新規種目のラートを、既存の総合型地域スポーツクラブに導入させていく際に発生する課題について考察を深め、その解決策を導くことを目的とする。

2. 新規種目導入に伴う一般的影響

ラートに限らず、既存のクラブに新しい種目が加わると、クラブ側にはどのようなメリットが生まれ、そして、導入を交渉する側にはどのような努力が求められるのか、といった、新規種目導入の際に生じる一般的な影響について先に述べる。

1) 総合型地域スポーツクラブ側のメリット

総合型地域スポーツクラブは、多くの地域住民のコミュニティとしての役割がある。そのため、競技力向上を目指す人々のためだけのクラブであってはならないし、子供だけを対象としたクラブというものも「総合型」の目的を果たすことにはならない。総合型地域スポーツクラブは、多くの世代、多様な目的・志向を持った人々を受け入れ、それぞれの体力レベルにあっ

たプログラムを提供していくことが必要であり、色々な人が自分にあったスポーツとのかかわり方を、広く選択できるクラブであることが重要になってくる。また、クラブが地域に根付き、住民が永くそのクラブに関わって行くことができるように、それぞれのライフステージが変わっても、それに応じたプログラムを選択できるということが、理想の形である。このように、きめ細かく住民の様々なニーズを満たしていくためにも、総合型地域スポーツクラブが多種目、多様なプログラムを用意しているということは、必要な要素となってくる。1-3)で述べたように、クラブが抱える課題として「活動種目の拡大」が挙げられているが、新規種目を導入することで、それらの課題の解消にもつながる。さらに、住民のニーズに応じた種目や、今まで体験したことのない新鮮な魅力あるプログラムが加われば、会員数も増加し、多くのクラブが課題としている「会員の確保」にもつながって行くであろう。

クラブがたくさんの種目を用意しているということは、様々な人々のニーズを満たすことができ会員の確保につながる、ということの他にも、多くの社会的なメリットがあると考えられる。例えば、9歳から12歳ごろのゴールデンエイジと呼ばれる世代は、発育・発達の観点から動きの巧みさ、運動技能を習得するのに最適な時期であるとされている。このころは、大人顔負けの高度なテクニックを身につけることもでき、さらに一度習得した運動技能は年齢を重ねても忘れることがない。このような時期に、多くのスポーツ種目を経験しておくことは、その後の成長や運動能力の向上にもとても良い影響を与える。また、多くのプログラムが用意されていることの利点として、例えば、目的や趣味嗜好の異なる会員も同じクラブに通うことが可能になり、新たな交流が生まれるきっかけとなることが挙げられる。また、家族がそれぞれ違う種目に関わっても、同じスポーツクラブにおいて一家で楽しむことができる、といったことも考えられる。

2) 導入を交渉する側に求められる努力

まず、導入交渉前に必要なこととして、既存のクラブを理解することが必要不可欠である。総合型地域スポーツクラブは、設立段階から、創設メンバーを含む地域住民が何度も話し合いを重ね、創設を進めてきたはずである。例えば「なぜ総合型地域スポーツクラブを創るのか」ということから、「どのような形で、クラブは住民のスポーツライフを支えていくのか」といったことまで、地域の特性を考えて様々な角度から検討し、共感できる理念や目的を創り上げ、共有し、クラブは成り立っている。新規種目を導入させようとする側は自分たちの主張の前に、そういったクラブ側の理念を十分理解しなければならない。また、これまでのクラブの活動の歴史や実績も、十分に尊重する姿勢で臨んでいかなければ、相手に受け入れてもらうことは難しくなると考える。

特にあまり広く知られていないスポーツ種目に関しては、クラブ側と慎重に信頼関係を構築していく必要がある。そのためには相手の立場に立ち、様々な事柄を明確に示していく必要がある。相手の立場に立って考えると、大きく分けて二種類の視点が考えられる。一つ目は、「相手にとって有益なことは何か」ということである。その新しい種目をクラブに取り入れることによって、どのような年齢層の会員にとって、どのような身体的効果があり、どのような心理的な効能が期待できるのか、さらに、その種目を続けることによって、会員同士でどのようにコミュニケーションが深まっていくのか、といったことである。さらには、新しい種目を取り入れることによって、どのようにクラブが良くなり、ひいては地域が良くなっていくのかということまで、その種目の魅力や、それを取り入れることのクラブ側のメリットを、誰にでもわかりやすく噛み砕いて伝えることで、相手にとって何が有益なのかという事柄を明確に示す。

二つ目は、「相手が不安に感じていることは何か」ということである。クラブのスタッフが今まで経験したことのない種目を取り入れるときなどは、その種目の安全性や難易度等、不安

に感じる点は多々出てくる。特に安全面に関しては、クラブ側も慎重になる部分である。昨今、教育現場や運動指導現場において、子供の怪我や突発的な体調の変化を、指導者の責任として訴訟問題まで持ち込まれるケースが多々ある。活動中にどのような事故が起こり得るかを予見・予測する「危険予見義務」と、予見した危険に対して、適当な対策を講じる「危険結果回避義務」は、スポーツの指導現場では強く求められる⁽³⁾。クラブ側の不安を払拭するためには、導入させようとする種目の危険度、そして、それに対する安全対策について、しっかりとした説明をしなければならない。逆に、これまでの怪我の症例研究や緊急対策などの基盤がしっかりとしていると、クラブ側の不安も軽減され、信頼度も高まってくると考える。怪我の問題だけではなく、これまでの実績や、体験した人々の感想等を、簡単にわかりやすい資料として相手に提示することも、安心感を得ることにつながるであろう。場合によっては、実際にクラブのスタッフに体験していただくことも、有効である。

以上のように相手の立場に立ち、「相手にとって有益なこと」、「相手が不安に感じていること」という二つの視点から考えられる事柄を明確にし、ひとつひとつ説明し、必要に応じてそれらを簡単な資料として提示することが、導入を交渉する側に求められることであると考えられる。

3. ラートに特徴的な課題と考察

次に、ラートを既存の総合型地域スポーツクラブに導入させようと交渉する際に生じる、特徴的な課題について考察を深めて行きたい。

1) ラート運動について

まず、ラート運動の説明を行う。ラートは二本の同じ大きさの鉄のリングが、ステップバー、開脚バー、グリップバーによって溶接されており「揺れる」、「転がる」という器具の特性をもつ【図2】。その器具の特性をいかして様々なラート運動が行われる。主な運動内容は以下の3種類に分類されている。

- a. 直転：ラートをまっすぐに回転させながら、その中で姿勢変化や様々な運動を行う【写真1】。
- b. 跳躍：ラートをまっすぐに転がし、助走をして跳び乗り、跳び降りる一連の動きの中で様々な運動を行う【写真2】。
- c. 斜転：一本のリングのみでラートを螺旋状（コインが倒れて回転するように）に回転させながら、その中で姿勢変化や様々な運動を行う【写真3】。

このようにラートは、多方向に転がる器具の特性により多彩な運動内容を可能にする。つまりラートは、三次元の空間をダイナミックに使用して非日常的な身体感覚、特に運動遊びの中でも「めまい」⁽ⁱⁱ⁾を楽しむための器具として適しているといえる。

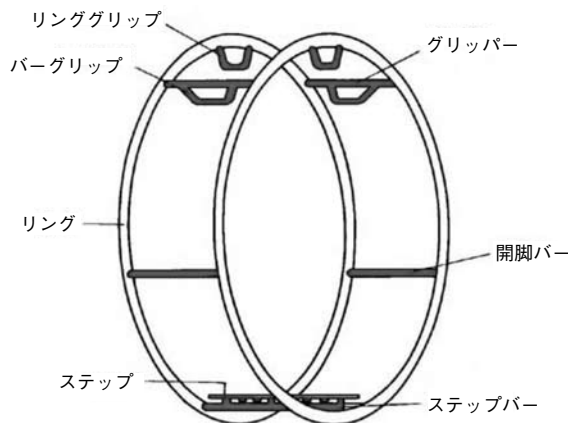


図2. ラート



写真1. 直転



写真2. 跳躍



写真3. 斜転



写真4. 側方回転

初心者が一番最初に体験する運動課題のひとつとして、直転の「側方回転」という技があげられる【写真4】。足部をベルトでステップに固定し、両手でバーグリップを握り側方に回転するという技であるが、側方回転の技術は、他の類似の運動課題において、基本となる技術を多く含んでいる。

2) 運動特性上の課題と考察

ラートは重量のある鉄でできた、円形で動きの不安定な器具である。また、側方回転に見られるように、頭部が下になる局面がある。そのような特徴から、ラート運動の安全面に対する不安を感じる人は少なくないだろう。ラート運動を体験したことのない人から「足はベルトから抜けることはないのか?」、「回転を自分で制御できるのか?」、「筋力は必要なのか?」といった質問をよく受ける。また逆さの状態、指示されたとおりに自分の体をコントロールできるものなのか、といった不安もあるだろう。このような不安感を払拭することが、ラートを導入交渉する際の第一の課題であると考えられる。そこでラート運動を行ったことのない初心者は、

習熟していない段階ではどのような動きをする傾向があるのか、といった特徴と、それを踏まえた指導上の安全対策の考え方を示して行くことにする。

2004年9月2日、ラート運動を行った経験のないT大学の大学生26名(男性3名、女性23名)を対象に、側方回転におけるラート初心者の特徴を、ビデオ観察と内省調査の観点から調べた⁽⁴⁾。そこで明らかになった初心者の主な特徴を以下に述べる。

a. 足首の背屈について

側方回転を行う際の足部の使い方として、つま先を伸ばして足部をベルトに固定する方法が基本の技術である【図3】。側方回転を実施する前の段階で正しい技術について説明し、つま先の使い方について部分的に体験させたにも関わらず、いざ側方回転をしてみると、それができずに【図4】のように回転の途中で足首を背屈させる被験者が見られた。

そのような動作が見られた被験者は全体の85%であり、正しい技術ができた被験者が全体のわずか15%であった。それにも関わらず、内省調査により「つま先を伸ばすこと」について

46%の被験者が「できた」または「どちらかといえばできた」と肯定的に捉えており、実際の様子と一致しない。このことから、一部の被験者の中には、回転中の自分の状態を正確に把握できていない様子が伺える。足首の背屈の原因は、つま先を伸ばして足部をベルトに固定する技術が未熟なために、足首を背屈させることで、ベルトに足をひっかけようとする動きがおこったものと考えられる。

b. 首の背屈について

側方回転を行う際、顔を正面に向けて回転することが基本であり【図5】、被験者に対して説明も行った。しかし被験者の中には、【図6】のように回転の途中に首を背屈させる者が54%見られた。そして首の背屈と同時に、腕を伸展させる動作も多々見られた。

側方回転は、マット運動における側方支持回転と類似した運動であるが、その運動では床を見て着手することが基本である。被験者にとってマット運動における側方支持回転の方がより身近な運動であるため、ラート運動における側

方回転でも、被験者は首を背屈させて床を見たという可能性もあると考えられる。また慣れない運動の場合、運動制御が不十分であるため生得的な反射がしやすい。首の背屈は、立ち直り反射⁽³⁾により頭部の位置を一定に保とうとする反応が現れたということも、一つの要因なのではないかと推測できる。

c. 回転操作について

側方回転を実施する前の段階で、どのように回転の勢いをつけ、側方回転に入っていくかという準備動作の説明と確認を行ったが、それができずに側方回転を開始できなかった被験者が全体の8%見られた。また回転を開始できたものの、その途中でラートが停止した者が69%も見られた。その中でも、ラートが90度ほど回転したとき、つまり身体が床に対して平行になる局面で停止した者が多かった。回転の勢い不足と、重心移動ができていなかったことが主な原因と考えられる。そして、途中で停止せずに、補助なしでラートを一回転させることができた被験者が23%であった。



図3. 正しいつま先の使い方



図4. 足首の背屈が見られた被験者



図5. 顔を正面に向けた側方回転



図6. 首の背屈が見られた被験者

d. 興味度と恐怖心について

実験時は側方回転の技術指導だけでなく、運動遊びも含め、一時間ほどラートをを用いた指導プログラムを実施した。その時間を通したラート運動全般の運動感について「興味度（楽しかったかどうか）」、「恐怖心（怖かったかどうか）」などの観点から被験者にアンケートを実施した。

興味度に関して「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と答えた被験者は100%であった。被験者全員がラート運動を少なからず楽しいと感じた要因の一つとして、器具の中に入って揺れる、転がる、移動するといった、日常生活では味わえない新鮮な感覚が、楽しさやおもしろさにつながったものと考えられる。このことは、自由記述の感想において、『重心のかけ方で動きが変わるのでおもしろい』、『初めて感じる感覚で楽しかったです』という、新たな感覚・経験に関する記述が見られたことからもうかがえる。また、『ちょっと怖かったけど楽しめました』という記述もみられ、慣れない運動に対する恐怖心はあったにも関わらず、ラート運動を楽しむことができたと考えられる。被験者についての実態調査で、「ラート運動を以前から体験してみたいと思っていましたか?」という質問に対して、約1割の被験者は、「どちらかといえば思っていないかった」と答えたが、一時間のプログラムを終え、被験者全員が興味度に関して「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と答えた結果となった。

恐怖心に関して、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と答えた被験者は、54%であった。半数以上の被験者が何らかの恐怖心を感じていたのは、『普段はしない姿勢なのではじめは少し怖かった』という記述からうかがえるように、慣れない姿勢に対する不安感が恐怖心につながったものと考えられる。

以上のようなラート初心者の特徴を踏まえ、指導上の安全対策の考え方を示して行く。まずaの、足首が背屈してしまい足をベルトに固定することができない、という特徴から、初心者は足がベルトから抜けやすくなり、落下の危険性が発生するということがいえる。落下防止の

ために、補助ベンディング^(iv)の活用が有効であると考えられる。85%の被験者が、つま先を伸ばして足をベルトに固定する技術ができていないことから、それが初心者にとって難しい技術であるといえる。さらに、内省調査による技術の自己評価と、ビデオ観察による実際の技術の出来・不出来が一致していなかったことから、初心者にとって、回転する中で意識的にコントロールすることが困難な技術である、ということもうかがえる。事前に技術指導したからといって、初心者がすぐにできるようなものではないため、ラートに慣れ、自己の身体を意識できる余裕が出来るまでは、補助ベンディングを活用することが賢明であると考えられる。次に、bの特徴のように首が背屈してしまうと、大部分は腕が伸展し腹部が前に突き出し、体が反った状態になることが多い。そのような姿勢では、重心移動によりラートを進めていくことが難しくなり、さらに、腹部が前に出ることにより身体重心がラートから外れ、器具が横に揺れてしまうことがある。特に、体重の多い男性、さらに適正サイズより小さめのラートを用いている場合には、ラートが揺れやすくなるため注意が必要である。顔を正面に向けさせるためには、回転中に目線を向ける目印のようなものを示しておくことが、有効であると考えられる。例えば、床を見るのではなく、「壁にかかった時計を見るようにする」などである。ただ、「前方を見るように」という指示よりも、具体的に動作に現しやすいためと考えられる。また、ラートが横に揺れてしまったときに、揺れを止めるための補助者をつけることも安全対策の強化につながる。cの、回転の途中でラートが停止してしまうという特徴からも、ラートを押し進める補助者をする者が必要である。b、cの特徴から、ラート運動は補助者と二人組みで行うことが望ましいといえる。最後にdに示した特徴より、ラート運動は初心者にとって、楽しさを感じながら取り組むことができる運動であると同時に、半数が何らかの恐怖心を感じていたことがわかった。初心者が恐怖心を軽減していくことができるよう、また、怪我を予防する観点からも、レベルに応じたプログラムを実施し、安全に配慮した

指導と環境づくりを行っていく必要がある。また、初心者を安心させる言葉がけも重要であると考ええる。

以上のように、初心者の特徴と安全対策の考え方を明確にしたが、今後は、これらを踏まえた安全管理マニュアルの作成、技を発展させる際の注意点の明確化等を行い、可視的にひとつの資料として示していくことが、導入交渉をスムーズにするために必要になってくるであろう。

3) 活動運営上の課題と考察

次に活動を行う際に生じる、運営上の課題について考察して行く。ラートに特徴的な課題となるものは、主に、活動場所と器具保管場所を含めた場所の確保、そして資金の確保の二点である。

a. 場所の確保について

使用するラートのサイズは、個人の身長や競技部門によって変わってくるが、おおよそ直径2mほどである。それが2次元、3次元的に回転するのであるから、広い場所が必要となる。ラート競技の競技エリアは、参考までに直転において3m×23m、跳躍において3m×20m、斜転において14m×14mである。広い活動場所、さらに器具の保管場所に関して、クラブ自身の所有施設がない限り、公共の体育館を借用する、または学校開放事業^(v)を活用して体育館を使用させていただくということが現実的である。行政さらに学校関係者の理解を得て、場所確保のための協力を仰ぐには、どのようなことが必要になってくるのか考察して行く。まず、ラートにおける地域貢献性を主張できるかどうか重要であると考ええる。先に2-2)で述べたことと重なる部分もあるが、地域住民がラートを行うことによって、住民に対してどのような利益をもたらすか、さらにはどのように地域が良くなっていくのかという地域貢献性を伝えていくことで、行政の協力も得やすくなる。また、種目の魅力を端的に、根拠をもってわかりやすく説明できることが説得力を生む。例えば「ラート運動は、各自のペースや好みに合わせて技を選択し、発展させていくことが可能であるため、運動に抵抗がある

子供も取り組みやすい種目である」などである。事前にラートのアピールの仕方、魅力をまとめておく必要があるだろう。そして、活動実績も重要な要素である。過去にどのような活動を行ってきたのか、伝えることが出来れば信頼度も上がると考える。

b. 資金の確保について

ラートを総合型地域スポーツクラブに導入させていくために、どのようなステップが考えられ、その際必要な資金はどのようにして確保するか、ということを考察して行く。既存のクラブにはそれぞれの理念があり、またクラブの会員層や需要、さらにクラブの事情などそれぞれ異なる。そのようなこともあり、導入にあたっては、少なくとも1つのクラブで定期的な教室開催をさせていただくことを目標として、複数のクラブに交渉していくことが望ましい。交渉の際にはそれぞれのクラブでラート体験会を開催し、ラートのおもしろさやむずかしさ等を実際に地域住民に体験してもらうことが有効である。ラートは個人の身長によって、適正サイズが異なることもあり、体験会では大きさの異なるラートを複数用意する必要がある。また、安全強化のために補助ベンディングも必要である。現在、ラートの器具自体は一台約20万円である。高額なこともあり、体験会用にラートを数台購入することは現実的ではないと考えられるため、ラートと補助ベンディングを日本ラート協会からレンタルするという方法がある。その際、ラート導入に向けた体験会開催が、ラートの普及・振興につながるという接点をもとに、日本ラート協会と協力することが、双方にとって有用であると考ええる。体験会実施のための費用を確保するために、独立行政法人日本スポーツ振興センターや笹川スポーツ財団など、スポーツ振興機関の補助金、助成金制度を利用したい。しかし補助金・助成金は、各種目の母体となるスポーツ団体（日本ラート協会など）でなければ、申請が難しい部分があるため、協会と協力することが必要になってくる。助成金が日本ラート協会にあれば、ラートの無償レンタルも可能となり、さらに器具運搬の費用も助成金でまかなうことができるなど、様々な点

で体験会開催にあたっての利点が生まれる。

以上のように、活動場所の確保や資金の確保において、お互いにメリットが発生する形で協力を仰いでいくことが必要となってくる。

4. おわりに

新規のスポーツ種目が、既存の総合型地域スポーツクラブに加わっていく過程で、導入を交渉する側は様々な人や機関に対して、種目の説明、そして導入の説得をしていく段階がある。その際根本的に重要なことは、相手の立場にたつという意識である。その種目の関係者の間では当たり前のように把握していることでも、他で通用するとは限らない。そのため、周囲の理解を得るために、誰にでもわかる言葉で説明できること、加えてわかりやすい資料等を準備することが、円滑に物事を進めていくために必要な手立てとなると考える。さらに、そのような作業を経ることによって、種目に対する信頼が深まり、様々な分野からの協力を得ることにつながっていくのではないかと考える。

最後に、これまでスポーツをする環境は、学校や行政から提供されるもの、または民間のフィットネスクラブなどで、客として受けるサービスという意識が高かった。しかし現代は、国が総合型地域スポーツクラブ育成に、多大な予算と労力をかけていることからもうかがえるように、これからは地域住民自らが、スポーツをする環境を創り出し、地域に密着する形でそれを維持していくことが求められている。他力本願的なやりかたでは、安定した生涯スポーツ社会が実現していかないのだ。総合型地域スポーツクラブには、生涯スポーツ社会の実現のみならず、現代社会に不足している地域コミュニティの構築、地域による教育など、多くの役割が期待されている。もともと、総合型地域スポーツクラブという概念は、ヨーロッパで発展している地域スポーツクラブを手本としているものであるが、ヨーロッパ、特にドイツではこのようなクラブ文化はすでに根付いている。空いている時間に人々は自然とクラブに集まり、地域の仲間と共に、健康的な時間を過ごしているのだ。日本においても様々な課題を乗り越え、そ

して総合型地域スポーツクラブ文化の定着を通じて地域が活性化し、人々の暮らしが豊かになるように願う。

【注】

- (i) ラートはドイツ語で「Rhönrad」という。その語源は、発祥の地「Rhön」と、ドイツ語で輪の意味を持つ単語「Rad」を合わせたものである。日本では「Rhön」の発音が難しいことから「Rad」のみを引用し「ラート」という親しみやすい名称で呼んでいる。英語では「wheel gymnastics」と呼ばれている。
- (ii) ロジェ・カイヨワは遊びの要素をアゴーン(競争)、アレア(偶然)、ミミクリ(模倣)、イリンクス(めまい)に分類した。めまいはそのうちのひとつで、心理的、身体的均衡を失わせる動作すべてを含む。回転したり、跳び上がったたり、重心の位置を急激に変化させる運動は、心身の均衡を失わせるおもしろさをもっている⁽⁵⁾。
- (iii) 動物が体位を正しい位置にとり直し、また正しい体位を保とうとする時の一連の反射群であり、人間は頭頂を天に載いて、重力方向に対して顔が垂直に、口が水平になる体位をつくりだす。
- (iv) 補助ベルトともいう。通常のベルトにかかとを覆う部分を付け加えたもので、それにより、ベルトから足が抜けにくい仕組みとなっている。
- (v) 学校の体育施設を、学校教育に支障のない範囲において地域住民のスポーツ活動に供する事業。

【引用文献】

- (1) 文部科学省、「今後の総合型地域スポーツクラブ振興の在り方について～7つの提言～」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/009/toushin/_icsFiles/fieldfile/2009/08/19/1283286_1_2.pdf) (2010. 2. 23参照)
- (2) 文部科学省、「平成20年度総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果概要」(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/fieldfile/2010/01/291234765_2.pdf) (2010. 2. 23参照)
- (3) 森浩寿、ジュニアスポーツと法律、「Sport JUST vol.456」、スポーツジャスト編集委員会・(財)日本体育協会日本スポーツ少年団、(三省堂

- スポーツソフト、東京)、pp.16-17、(2009)
- (4) 深瀬友香子、ラートの初心者指導に関する一考察～直転における側方回転に着目して～、「H16年度 筑波大学修士論文」、(筑波大学、茨城)、pp.11-46、(2005)
- (5) 片岡康子、舞踊の意味と価値、「舞踊学講義」、第1版、舞踊教育研究会編、(大修館書店、東京)、pp.6-7、(1991)

【参考文献】

- 文部科学省、「総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル」、http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm
- 日本体育協会、「総合型地域スポーツクラブ」、<http://www.japan-sports.or.jp/local/index.asp>
- 独立行政法人日本スポーツ振興センター、「スポーツ振興助成」、<http://www.naash.go.jp/sinko/index.html>
- 松澤淳子、地域スポーツクラブのマネジメント、「体育の科学57巻1月号」、日本体育学会、(杏林書院、東京)、pp.29-33、(2007)
- 谷塚哲、「地域スポーツクラブのマネジメントークラブ設立から運営マニュアルまで」、第1版、(ガンゼン、東京)、(2008)

